

2023（令和5）年度 土橋遺跡資料整理だより

令和 5 年 4 月 25 日
阿賀野市 生涯学習課
株式会社 帆 苺 組

1. はじめに

令和 3 年度から、土橋遺跡（令和元・2 年度発掘調査）の資料整理を実施しています。資料整理を通して様々なことがわかってきました。8 月下旬に『発掘調査報告書』を刊行する予定ですが、その前に成果の一部をご紹介します。

2. 遺跡の概要

遺跡には上面・下面があり、上面は平安時代（約 1,000 年前）、下面は縄文時代後期（約 4,000 ～ 3,500 年前）になります。

縄文時代後期の集落は、埋設土器が密集する「葬送の場」、大型配石がある「マツリ場の場」、建物の炉跡・柱穴などがある「生活の場」、大量の土器・石器・土偶が廃棄された「モノ送りの場」に分かれます。

集落の様子については、『よみがえる土橋遺跡』を動画配信していますので、YouTube「阿賀野市公式チャンネル」をご覧ください。また、発掘調査時に作成した「発掘調査だより」を阿賀野市ホームページで公開しています。



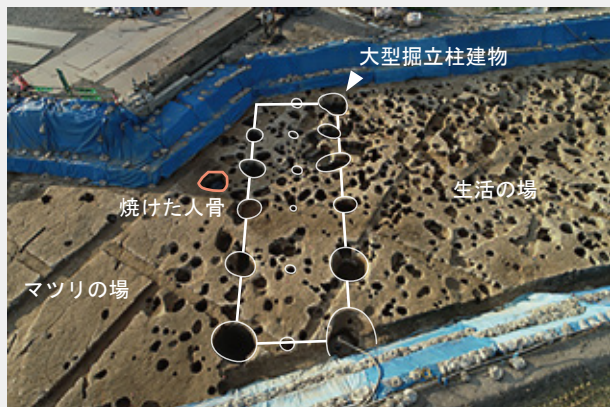
① 遺跡近景

3. 大型掘立柱建物と焼けた人骨

それぞれの「場」の境界には、特徴的な遺構が見られます。「マツリ場の場」と「生活の場」の間には、大型の掘立柱建物がつくられます。建物は面積 75 m²以上となり、このクラスの建物は、県内では村上市長割遺跡〔滝沢ほか 2011〕にあるだけです。このことから、とても大きな建物であったことがわかります（②）。

この大型建物の隣では、約 90cm の穴の中から焼けた人骨が出土しました（③）。人骨は 1 体分で、腕や足の骨など長い骨を四角く組み、その中に頭蓋骨などの骨を配置しています。このような葬法は、「盤状集積」、「盤状集骨葬」と呼ばれ、縄文時代晩期（約 3,000 年前）の愛知県で流行します。土橋遺跡の焼けた人骨はこれよりも古く、焼けた骨は国内最古の事例であり、とても貴重です。また、愛知県のは、骨が焼かれていないなどの違いもあります。

焼けた人骨は、「マツリ場の場」と大型掘立柱建物の間にあります。亡くなった人を葬る前に、様々な儀式が行われたことが想像されます。



② 大型掘立柱建物と焼けた人骨



③ 焼けた人骨の出土状況

4. 石器の石材と行動範囲

土橋遺跡で出土した石器の石材は、遺跡付近で採集できるものと、採集できない遠隔地の石材があります。最も多かったのは、遺跡から 10km ~ 20km 圏内の石で、土橋遺跡の石器石材の大半が地元の石でした。遠隔地の石材には、糸魚川周辺のヒスイ・蛇紋岩（透閃石岩）、群馬県や栃木県で産出する緑泥片岩、神津島産の黒曜石などがあります。

「マツリの場」の配石には大・小の石が配置され、青・緑・白など色彩豊かな石が選ばれています（④）。このうち緑色岩は石器石材として利用されていません。このことから、「マツリの場」では、石の「色」がとても重要だったことが想像できます。

緑色岩は、20km 圏内にある早出川と支流の仙見川・杉川でたくさん採集できます。特に仙見川で採集した石は、配石の緑色岩とよく似ています（⑤）。白色の玉髄（メノウ）は、10km 圏内の都辺田川と支流の海老漣川で採集できます。

こうした石材の利用から、土橋遺跡の縄文人の日常行動範囲が 10km 圏であったことが見えてきます。必要に応じて 20km 圏内まで出かけたのでしょう。

10 ~ 20km 圏内には、ツベタ遺跡・矢津遺跡など同時期の遺跡があり、これらの遺跡ともさかんに交流していたと思われます。



④ 「マツリの場」の配石

参考文献 滝沢規朗ほか、2011 『長割遺跡』 新潟県教育委員会・(財)新潟県埋蔵文化財調査事業団



⑤ 周辺の遺跡と石材採集地